

近代の工芸家と数寄者 ―交流が育んだ美の凄み―

Japanese Crafts of the Modern Era: Sublime Beauty Born of the Meeting of Makers and Connoisseurs

近代以降、日本の工芸が大きく発展した要因の一つに、茶の湯の文化との関りがある。そもそも、幅広く特色ある日本の工芸の基礎は、政治的に安定し長く続いた江戸時代に、各地の諸藩がすすめた殖産政策による。しかし、元号が変わり世の中の仕組みが変化することで、手厚い援助が得られなくなった職人たちは安定した仕事が減り、それにともなって高度な技術も、多彩な技法も、次の世代へ継承する手立てが途切れてしまうことも少なくなかった。

そういった背景の中で、名人・名工と呼ばれた職人たちに手を差し伸べたのが、茶の湯に夢中になっていた数寄者と呼ばれる人たちであった。その数寄者たちは、それまでとは大きく変化した時代の流れの中で、新たな事業を興して発展させ、それによって得られた富により、名品や古美術の収集を積極的に行うとともに、自身の趣味趣向による茶の湯にまつわる道具の製作（制作）を依頼した。これにより、自らが考える茶の湯の確立に加え、衰退していた茶の湯の文化の復興にも寄与したのである。

職人（工芸家）たちは数寄者たちの注文を受けることで、自身の技術を維持し、それを次の世代へ伝えるかのように、優れた名品を数多くつくり出した。それらは、国の政策ともなっていた万国博覧会や内国勸業博覧会に出品するような、いわゆる個人作家としての工芸制作というよりも、これまでの日本の工芸文化の優れた部分をうまく纏わせつつ、注文主の意向も満足させつつ、自身の技を注ぎこむという姿勢であった。視点を変えれば、色気があり、洒落た、凄みのある作品が生み出されたという見方もできるだろう。とくにその凄みは、江戸時代に培われた日本のものづくりの文化が、江戸から明治、そして次の時代へと受け継がれるために必要であり、工芸家たちはそれを命がけて繋いでいこうとしたといえる。

また一方で、産業品の製作から枝分かれするように個人の美意識による作品の創造を目指そうとするつくり手（工芸家）、いわゆる個人作家による工芸制作も始まっていた。そこでは、西洋やアジアの工芸や美術を拠り所としつつ、自身が目指す工芸とは何か、自身がつくりたいとするモノ（作品）とは何かを工芸家たちは考えながら制作していった。そういった動向の中で、工芸家

たちの支えとなり目標となったものが、とくに近世以降につくり出され、近代の数寄者たちが果敢に収集した茶の湯のうつわであった。

その茶の湯のうつわを意識した工芸制作により、さまざまな工芸分野において素材や技術・技法を駆使した作品が生み出されていった。それらには江戸時代やその前から伝えられた技術・技法が用いられてはいるが、用途を前提とした機能性と実用性を重視した使い勝手のよい、いわゆる一般的な茶道具とは異なり、個人の美意識により生み出された想いを伝える「表現のうつわ」として制作されたものが少なくない。なぜなら、工芸家たちは自身の生きている時代を見据えつつ、造形や意匠に工夫を凝らし独自性を打ち出そうとした個性ある姿を目指そうとしたからにほかならない。

このような、出身も考え方も異なる工芸家たちが、数寄者を通して交流することで、新たな刺激を求めて、前者の職人たちから個性を求めて個人作家的工芸制作へと傾倒し、博覧会や官展（公募展）への出品を試みる者が現れた。また後者の個人作家たちからも、前者が体得している高度な技術を吸収し、独自の工夫を凝らして自身の作品に生かそうする者も現れた。

これら両者が交わることで、職人的な思考と個人作家的な思考の両立が保たれ、日本の工芸は再び隆盛していくのである。そして作品には、それぞれの凄みに加え、そのときどきの工芸家による新たな考えや造形が盛り込まれていくのである。

唐澤昌宏（国立工芸館長）

Karasawa Masahiro (Director, National Crafts Museum)